

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6月 20日現在

機関番号：33925

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16719

研究課題名(和文) ポーランドの文学、美術、公共空間におけるホロコーストの記憶のジャンル横断的研究

研究課題名(英文) Memory of the Holocaust in Polish Literature, Art, and Public Spaces: An Interdisciplinary Study

研究代表者

加藤 有子 (Kato, Ariko)

名古屋外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90583170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦中、ポーランドはナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺の現場となった。本研究は、ポーランドにおけるホロコーストの記憶の特殊性と変容をジャンル横断的かつ相関的に、文学、美術、歴史資料、新聞記事、歴史背景を突き合わせて捉え直す。第1に、その他の地域の記念碑や博物館展示との比較を通じ、社会的言説や記念碑の世界標準化とポーランド独自の文脈を明らかにした。第2に、ユダヤ人に対するポーランド人の態度を倫理的に問うトポスとして、ゲットーとワルシャワ・ゲットー蜂起に注目し、建物から飛び降りる人の姿がその象徴的イメージとして機能していることとその意味を、原イメージの記録写真を同定しつつ明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、欧米ではゲットーの記録写真が注目を集めている。忘れられつつあったワルシャワ・ゲットーの記録写真に光を当て、ポーランド的特殊性という観点から論じる本研究は、ホロコースト研究に対する一つの貢献である。日本ではホロコーストに対する関心が高いが、アウシュヴィッツ以外の絶滅収容所やゲットーの現状についてはあまり知られていなかった。本研究は、その空隙を埋めるものである。狭いナショナリズムに基づく第二次世界大戦に関する修正主義や否定論が世界的に強まるなか、国際的な研究ネットワークを築き、資料と専門知に基づいて社会に提言することは、学者の社会的責務であり、貢献であり、本研究もその一端を担う。

研究成果の概要(英文)：This project explores the memory of the Holocaust in Poland, which was once the focus of the Nazi genocide of the Jewish people. First, by comparing museum exhibits and memorials related to the Holocaust in Poland and other countries, I analyze the standardization of the Holocaust memorialization. Second, by comparing appearances of the Holocaust in Polish literature and visual art to archival photographs, journal articles, and the history of Poland, I focus on Jewish ghettos and the Warsaw Ghetto Uprising as a specific topos of the Polish memory of the Holocaust. I also collect memories of a "person jumping" from burning buildings during the Warsaw Ghetto Uprising and identify an archival photograph as its original source. I explain how the image has become a symbolic image of the relationship between Jews and non-Jews in occupied Poland. This study, by shedding light on a forgotten photograph, aims to contribute toward the field of Holocaust Studies.

研究分野：ポーランド文学

キーワード：ポーランド文学 ポーランド美術 ホロコースト ユダヤ人虐殺 ワルシャワ・ゲットー 記憶 博物館 写真

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ポーランドをはじめとする東欧諸国では、体制転換を経た 1990 年代以降、ホロコーストを含む第二次世界大戦の歴史の見直しが進んだ。それを背景に、2000 年代に入ると、第二次世界大戦中のユダヤ人虐殺の記念碑、施設や博物館の新規建設が相次いだ。社会学や文化研究の領域では、記念碑や収容所跡地の現状から、ホロコーストをめぐる社会的記憶やその表象を論じる研究が盛んになった。しかし、往々にして、美術や文学領域も含めたジャンル横断的視野からの研究は少ない。とりわけ、ポーランドにおけるホロコースト表象研究は、文学や美術など領域別に分かれて行われており、相關的に捉える研究はなかった。また、欧米や日本のホロコースト研究では、加害者ドイツ対被害者ユダヤ人という二項的図式のなかで、絶滅収容所が 6 か所作られたポーランドという「現場」の視点は抜けがちでもあった。

ポーランドという文脈で特筆すべきは、2000 年代以降、ヤン・T・グロスの著書『隣人たち』を契機に、第二次世界大戦中のユダヤ人虐殺へのポーランド人の関与が社会的に広く認識されるようになったことだ。ポーランドで新しく作られた博物館や文化施設、記念碑は、こうした歴史認識も含めた最新の学術的成果を踏まえていた。2014 年、首都ワルシャワの中心部、かつてのユダヤ人ゲットーの跡地にオープンしたポーランド・ユダヤ史博物館（通称ポリン）は、こうした歴史認識の変化の象徴的存在だった。

2015 年に開始した本研究は、1989 年の体制転換、2004 年の EU 加盟、EU 加盟後 10 年ほどの現在を一区切りと捉え、ナチス・ドイツによるホロコーストの「現場」となったポーランドの文学、美術、公共空間におけるホロコーストやユダヤ人の記憶の生成と変容を、近年の歴史認識の変化も含め、ジャンル横断的に、相關的に捉えなおすことを企図した。

2. 研究の目的

EU 加盟 10 年を迎えた研究開始時点を一区切りとして、ポーランドのホロコーストの記憶とそのイメージの生成・変容をジャンル横断的に、すなわち文学、美術や博物館や記念碑の記述、社会的、政治的言説等の動的関係性のなかで読み解く。1980 年代以降のホロコーストの表象をめぐる議論がもたらしたホロコースト表象の様式化や世界標準化を整理し、そこからポーランド独自の文脈と表象のコード、さらに絶滅収容所の作られた「現場」であるポーランドにおけるユダヤ人虐殺をめぐる記憶の特殊性を明らかにする。また、集合的記憶の形成に対する芸術の関与も検討する。

3. 研究の方法

(1) 町中に作られたユダヤ人ゲットーは、ポーランド人の隣人ユダヤ系住民に対する行動を倫理的次元で問うトポスとして戦後も機能している。本研究では、ヨーロッパ最大のゲットーであり、都市の真ん中に作られたワルシャワ・ゲットーと、そこで起きたワルシャワ・ゲットー蜂起に注目し、文学と映画を含む美術作品におけるその描き方の変遷、都市空間における記念のかたちの総合的調査を通して、ポーランド特有のホロコーストのイメージの生成、流通、受容のコードを冷戦期、体制転換期、EU 加盟後と時代的背景に照らしながら明らかにする。

(2) 音や匂いなど、視覚以外の感覚器官に関わる要素の記憶形成への関与について、文学を題材に考察する。

(3) ポーランド現代美術と公共美術に対する欧米からの影響を精査し、社会主義リアリズムの歴史にも目配りしつつ、ポーランド独自のホロコーストの記憶の形象化を、造形美術を中心に明らかにする。ホロコースト表象の様式化やグローバル化もそこから逆照射する。

(4) アウシュヴィッツ収容所跡地が博物館化され、世界遺産となり、社会学的研究が積み重ねられる一方、その他の絶滅収容所跡地は長く放置されてきた。近年、急速に記念化事業が進む。これらの絶滅収容所跡地の現状を調査する。さらに、現在進む記念化事業と EU の文化政策、その他の機関の関与、自治体の動き、ユダヤ文化遺産の所有権をめぐる論争、ナショナリズムとの関わりから、現状を分析する。

4. 研究成果

(1) ワルシャワ・ゲッター蜂起の最中、燃えるゲッターの建物の窓から飛び降りる人の姿がポーランドにおいて、ゲッターの象徴的イメージになっていることを、文学、絵画、ドイツ軍の記録資料から明らかにし、英語論文としてまとめた。ワルシャワ・ゲッターの象徴としては、「ゲッター少年」と通称される少年の写真が世界的に有名であり、その一方で、研究において忘れられていたのが、ポーランドの文学や美術に描かれたこの「飛ぶ人間」たちのイメージである。原イメージとなった一枚の写真の戦後の流通史、同じ出来事を描く版画シリーズの成立過程などから、このイメージをめぐるさまざまな断片的「証言」を集め、このイメージがポーランドにおいて、ポーランド・ユダヤ関係を倫理的に問う象徴的イメージとして機能していることを明らかにした。ゲッターをめぐる写真はホロコースト研究において、本格的な研究が始まったばかりであり、英語で刊行予定の本研究のインパクトが期待される。また、国内では、このイメージも現れるポーランドのホロコースト文学の古典であるゾフィア・ナウコフスカ『メダリオン』(1946)を日本語に全訳し、一般向けの詳しい解説を加えて刊行した。

(2) ワルシャワ・ゲッター跡地、ヘウムノ、ベウジェツ、トレ布林カ絶滅収容所跡地、さらにルブリン、ウーチ、ワルシャワ、グダンスクなど、ポーランドの都市部の新しい博物館やユダヤ人関連施設跡地の再開発の現地調査を行った。ポーランド・ユダヤ史博物館やユダヤ文化フェスティバルなど、ポーランド人とユダヤ人も含む複数の文化集団の共生の歴史を想起する傾向とともに、反ユダヤ主義の歴史も記憶する方向性が博物館や記念碑展示にはみられた。しかし、研究期間中、文化政策と政治的言説の変容とともに、後者が縮小される様子も見られた。ポーランドにおけるホロコーストの社会的記憶の現状は、福島県白河市にあるアウシュヴィッツ平和博物館のニュースレターに2018年、4回にわたって「ポーランドにおけるホロコーストの記憶」として連載した。日本において、ポーランドの最新のホロコーストをめぐる動向はほとんど報じられておらず、新しくできた文化機関や博物館、絶滅収容所跡地の現状報告もほとんどない。一般向けに写真とともにまとめたこれらの記事は、本研究成果の社会的還元のひとつとなった。なお、研究3年目、怪我をして現地調査がかなわず、研究完遂のために、研究期間を一年延長した。この結果、当初予期していなかった社会、政治状況の変化を研究の射程に入れることができたのは不幸中の幸いであった。

(3) ポーランドの状況と合わせて、ハンガリーやドイツ、フランス、イスラエル、ウクライナのリヴィウの記念碑や博物館を調査した。それによって、EUの東方拡大以降の旧東欧諸国におけるホロコーストをめぐる社会的言説や記念碑事業の共通性が見えてきた。東欧という枠組みも加えて考える必要性を認識した。2017年5月にハンブルクで開かれた中東欧におけるホロコーストをめぐる超領域的学会に参加し、各地域におけるユダヤ人虐殺をめぐるさまざまな領域の研究者との学術的交流を通して、今後の共同研究の基盤を築くことができた。

(4) 2016年から2017年にかけて、本研究課題を基課題として、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)を受けて、ポーランド科学アカデミー文学研究所のホロコースト研究チームに所属した。ワルシャワ・ゲッターの専門家の助言を受け、ゲッターの写真資料等を所有するワルシャワ・ユダヤ史研究所の資料、各博物館の美術作品、図書館資料の調査を集中的に行ったほか、毎週のように開催される関連トピックのセミナーや学会に参加し、上記(1)につながる研究を深化させたほか、研究ネットワークを広げることもできた。その際、日本におけるホロコーストの受容についての報告の依頼があり、調査過程で、冷戦下、日本におけるホロコーストの受容がヒロシマ・ナガサキをめぐる反核平和主義運動と密接に結びついていたこと、その結びつきが西側諸国では批判的に受け取られていたことなどが明らかになった。さらに、欧米の研究者との研究交流を通して、「多方向的記憶」(M・ロスバーク)や「ポスト・メモリー」(M・ヒルシュ)という記憶研究の方向性に触れ、ホロコーストや第二次世界大戦の出来事を比較研究的に捉える視野を得た。日本語、ポーランド語、ドイツ語、英語、イディッシュ語等を研究の言語として使うことのできる言語的利点を生かし、ホロコーストや原爆を、アメリカ、日本、ドイツ、ポーランドやソ連や東欧という国をまたがる冷戦構造とその後の流れのなかで捉える次の研究プロジェクトの構想が生まれた。

(5) 本研究を基課題とする科研費国際共同研究強化との共催として、2018年11月に名古屋で海外研究者を4名、日本の研究者を4名招聘し、国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶——ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」を二日間にわたって開催した。序論では、本研究のまとめとして、ホロコースト研究の現状やポーランドの状況を概観した。地域や専門領域を超えて専門家が多数集まり、活発な議論が行われ、今後の国際的な共同研究のネットワーク作りにも寄与することができた。

(6) ポーランドのホロコーストの記憶の変容をめぐる研究成果は1,2年以内に日本語もしくは英語書籍としてまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Ariko Kato, Japońskie publikacje o Zagładzie wydane po 1995 r., *Zagłada Żydów. Studia i Materiały* 査読有、14, 2018, pp. 632-647.

Ariko Kato, Recepcja Holokaustu w Japonii w perspektywie porównawczej: Auschwitz –Nankin – Hiroszima, *Zagłada Żydów. Studia i Materiały* 査読有、13, 2018, pp. 230-257.

加藤有子, ガリツィアの文化的複層性と連続性 文化遺産保存と18世紀バロック彫刻家ピンゼルを手がかりに『ポーランドとその隣人たち 2 フォーラム・ポーランド 2015 年会議録 Polska i jej sąsiedzi—Część II Forum Polska Konferencja』 査読無、2017、pp. 26-45.

〔学会発表〕(計 7 件)

加藤有子, 趣旨説明— ヒロシマ・アウシュヴィッツ のレトリックを超えて、国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶 ホロコーストと原爆を起点とする比較的アプローチ」ウィンクあいち、名古屋、2018.

Ariko Kato, The Reception of the Holocaust in Japan, a Comparative Perspective: Memorialization outside the Place, Present Past: Time, Memory, & the Negotiation of Historical Justice. 7th Annual Conference of the Historical Dialogues, Justice and Memory Network, Columbia U, NY, 2017.

Ariko Kato, Falling Persons and a Polish Context of the Holocaust: Rereading Zofia Nałkowska's "Medalions" and the Photographs of "The Stroop Report", The Afterlife of the Shoah in Central Eastern European Cultures: Concepts, Problems, and the Aesthetic of Postcatastrophic Narration, Universität Hamburg, Germany, 2017.

〔図書〕(計 5 件)

加藤有子訳、デボラ・フォーゲル、松籟社、『アカシアは花咲く』、2018、220.

Ariko Kato 他、Łódź: Muzeum Sztuki w Łodzi, *Montaże. Debora Vogel i nowa legenda miasta*, 2017, 464 (253-260).

加藤有子訳、ゾフィア・ナウコフスカ、松籟社、『メダリオン』、2015、120.

加藤有子 他、京都市立芸術大学、『死の劇場 カントルへのオマージュ タデウシュ・カントル生誕100周年記念事業記録集』2016、287 (62-72).

〔その他〕

加藤有子, ポーランドにおけるホロコーストの記憶 ワルシャワ・ゲッター、学术界の現在、『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』 査読無、61, 2019, pp. 6-7.

加藤有子, ポーランドにおけるホロコーストの記憶 ヘウムノとウーチの現在、『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』 査読無、60, 2018, pp. 6-7.

加藤有子, ポーランドにおけるホロコーストの記憶 ポーランド・ユダヤ史博物館、第二次世界大戦博物館『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』 査読無、59, 2018, pp. 4-5.

加藤有子、ポーランドにおけるホロコーストの記憶『アウシュヴィッツ平和博物館ニュースレター』査読無、58, 2018, pp. 6-7.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名： ヤツェク・レオチャク

ローマ字氏名： Jacek Leociak

研究協力者氏名： ヴィタ・スサク

ローマ字氏名： Vita Susak

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。